

〔書評〕

南不二男著

『現代日本語研究』

野田尚史

キーワード…文の構造、階層構造のモデル、A類・B類・C類、

『現代日本語文法の輪郭』、言語生活

要旨

- 1 『現代日本語研究』は、文の構造と言語生活の研究を中心に、南不二男の過去の論文三六本を収録した論文集である。
- 2 文の構造の研究では、AからDという四つの階層に分けて文を分析する方法をとっている。これは、日本語以外の分析にも応用できる可能性を秘めた、非常に独創的なものである。
- 3 南が考える「階層」の問題点は、次の二つを連動したものと考えていることである。

内部の構造——その成分の内部にどんな形式が現れるか
外部との関係——その成分がどんな環境に現れるか

- 4 この二つを分離すれば、南が扱っていない引用節や、不統一な分析をしている名詞的表現も適切にとらえられるようになり、さらに大きな理論に発展する可能性が高い。

- 5 言語生活の研究は、敬語や会話などコミュニケーションの問題を重視している。視野が広く、時代を先取りしている。

1 南不二男の現代日本語研究

『現代日本語研究』（三省堂、一九九七年）は、南不二男が七〇才になる年に、それまでの三六年間に書いてきた論文の中から三六本を集めて作られた論文集である。内容は大きく二つに分けられる。一つは、文の階層構造を中心にした文法に関するもの、もう一つは、敬語行動や会話分析など、言語生活に関するものである。

本書についての紹介や検討に入る前に、南不二男がこれまでに行ってきた研究を振り返っておこう。南の研究の特徴は、次に示すように、研究分野が広く研究方法も多様なことである。

研究分野——文法の研究、言語生活の研究など範囲が広い
研究方法——モデル重視、データ重視など多様である

研究分野について言うと、文法の研究は言語の体系を問題にするものであるのたいし、言語生活の研究は言語の運用を問題にするものである。この二つはたがいにまったく違う分野であり、一人の研究者が両方をカバーするのは珍しい。

研究方法について言うと、モデル重視というのは、たとえば渡辺実『国語構文論』（塙書房、一九七一年）のように、演繹的な方法で言

語体系などのモデルを作るものである。データ重視というのは、たとえば言語学研究会(編)『日本語文法・連語論・資料編』(むぎ書房、一九八三年)のように、帰納的な方法で言語の詳しい記述を行うものである。南はモデル重視とデータ重視のどちらかに徹することをしない。データを十分考慮に入れたモデルを作ったり、モデルを念頭に置いてデータを整理したりする。このような方法は、すつきりしないモデルや不徹底な記述になりやすいという短所もあるが、視野が広く柔軟な研究ができるという長所をもつ。

このような南不二男の研究の中で本書は、実質的には南の代表的な著書にならないが、形式的には代表的な著書になると思われる。

本書が実質的には代表的な著書にならないというのは、本書が過去の論文をそのまま集めただけのものだからである。南の代表的な著書は、『現代日本語の構造』(大修館書店、一九七四年)と『現代日本語文法の輪郭』(大修館書店、一九九三年)である。それに続くものをあげるとしても、『敬語』(岩波新書、一九八七年)や、南が担当した国立国語研究所『待遇表現の実態——松江24時間調査資料から——』(秀英出版、一九七一年)になるだろう。

本書が形式的には代表的な著書になるというのは、本書が南の歩んできた道のりを一冊で見渡せる「カタログ」あるいは「自分史」になっているからであり、本の体裁もこれまでの南の著作とは違って大判のハードカバーになって立派だからである。

南の研究はこれまで一部の研究者の間では非常に高く評価されながらも、書評など公の場で取り上げられ評価されることが少なかつた。形式的に南の主要著書となる本書の出版は、南の研究の重要性を学界の内外に知らせるには大きな意味があったと言える。

2 文の構造研究の獨創性

南が行った文法研究のもつとも大きな功績は、従属句の研究をもとにして、文の構造を階層という観点からとらえたことである。南は、本書の「I-2 複文」で、「従属句」を文法的性格から見ると、文らしくないものから文的な性格が強いものまで段階があるとして、次のようにA、B、Cの三類に分類している。

類		例	内部に現れる形式	
A	B		多	少
しながら、	つつ	したが、	たら	文らしさ
				大

この分類のいちばん大きな根拠は、それぞれの類の従属句の内部に現れる形式の多さである。たとえば「ます」と主題の「くは」という形式を例にすると、A類の従属句には「ます」も主題の「くは」も現れない。「*たばこをのみましなから……」とも「*弟はたばこをのみながら私は……」とも言えないからである。B類の従属句には「ます」は現れるが主題の「くは」は現れない。「雨が降りましたので……」とは言えるが、「*雨は降ったので……」とは言えないからである。C類の従属句には「ます」も主題の「くは」も現れる。「お金はもうありませんから……」と言えるからである。

南はこのような従属句の分類をもとにして、「I-3 述語文の構造」で、文の構造の分析に進み、文が次のような四つの段階からできているという主張を行う。このA、B、Cの段階はそれぞれ従属句のA類、B類、C類に対応する段階であり、Dの段階は文になつてはじめて出てくるものである。

段階	例
A	水をやる
B	あすの朝 <small>私</small> が水をやりまします
C	すみれの鉢は、あすの朝が水をやりましよう
D	Kさん、すみれの鉢は、あすの朝私 <small>が</small> 水をやりましようね

このような文の階層構造のモデルについては、『現代日本語文法の輪郭』に体系的な記述がされていて、そちらが決定版だと言える。本書に収められているのは、その原型と言える古い論文である。

本書に収められた論文やその後の著書を見ていて気づくのは、他の研究者による研究への言及がはじめのうちはまったくなかったのが、しだいに増えていくことである。

このことについては、次のような事情が想像される。はじめ、国立国語研究所『話しことはの文型(2)——独話資料による研究』(秀英出版、一九六三年)の研究の過程で、従属句をその内部に現れる形式の多さによって分類できるという大きな発見をし、本書に収められた「複文」を書いたり、それを文全体に拡大して「述語文の構造」を書いたりする。しかし、それにたいする反響がほとんどなかったため、文を階層的に見る研究は他にもたくさんあることを強調する必要を感じ、林四郎や渡辺実、三上章、北原保雄などの研究に言及することが多くなったのではないかと思われる。

南の「文の階層構造のモデル」は、実際、長い間その価値がほとんど認められなかったと言っている。南の研究をきちんと理解したうえで、それにたいする修正案やそれを応用した研究が出てくるのは、一九八〇年代後半になってからである。その代表は、田窪行則(一九八七)や益岡隆志(一九九七)である。今後、南の研究は、

文法のさまざまな現象の分析に利用されるだけでなく、文章・談話や語構成、意味など、他の分野の研究にも応用されていくと思われる。また、文の階層は日本語特有のものではないはずであり、他の言語の分析にも応用されていくものと期待される。

南の独創的な「文の階層構造のモデル」がたどってきたこのような軌跡は、三上章の独創的な「主語廃止論」がたどった軌跡をほぼ二十年遅れて追っているようにも見える。三上の研究を基礎にした「主題」の研究がしだいに盛んになってきたこれまでの状況を考えると、南の研究を基礎にした「階層」の研究もこれからますます盛んになっていくと予想される。

3 文の構造研究の問題点

南の「文の階層構造のモデル」は、長い間、他の研究者によって批判されることもなければ発展させられることもなかったため、三十年以上もほとんどモデルチェンジされることがなかった。それは最初のモデルがすぐれていたからではあるが、現在の研究水準から見ると、当然のことながら問題点も多い。

もっとも大きな問題は、南が考える「階層」には次の二つが分離されないまま、連動したものとして同居していることである。

内部の構造——その成分の内部にどんな形式が現れるか
外部との関係——その成分がどんな環境に現れるか

この二つの違いを、次の(1)の「手をつないで」で説明しよう。

(1) **手をつないで**歩きながらキャラクターをたべました。

「内部の構造」というのは、「手をつないで」の内部に「手を」のような格関係(主語以外を表す語は現れるが、主題の「は」や「ま

す」は現れないというようなことである。その基準によって「手をつないで」をA類と認定するのである。

「外部との関係」というのは、「手をつないで」が「手をつないで歩きながら」のように、A類の「くながら」の内部に現れるというようなことである。その基準によって「手をつないで」をA類と認定するのである。

「手をつないで」の場合は、内部の構造からでも外部との関係からでもA類と認定されるので、この二つは連動しているように見える。しかし、引用節や連体修飾節のように、この二つが連動していないものもある。

たとえば、南が扱っていない、次の(2)の「早く逃げろ」というような引用節を考えてみよう。

(2) **早く逃げろと**叫びながら、こちらに走ってきた。

「内部の構造」の観点からは、「早く逃げろと」の内部には「逃げる」のような、C類の従属句にも現れない命令形が現れるので、引用の「く」とは、D類と認定されるはずである。ところが、「外部との関係」の観点では、「早く逃げろと」は「早く逃げろと叫びながら」のように、A類の「くながら」の内部に現れるので、A類と認定されると思われる。

このような矛盾がおきるのは、引用節が特殊な性質をもっているからである。引用節は、内部の構造から見ると文に近いが、外部との関係で見ると、述語が要求する「くを」などの格成分に近い。このような節までも対象にして考えるためには、成分の「内部の構造」と「外部との関係」を別のものとして分ける必要がある。

南が扱っている範囲内で、「内部の構造」と「外部との関係」を分

離しないためにおきる問題がもつともはつきり現れているのは、「I・4 名詞的表現の構造」である。南は名詞的表現を次のようにAからDの四段階に対応させようとする。

段階	名詞的表現の例
A	住宅の申込み 愛情の表現 京都からの帰り道 私の本の
B	きのうぼくが買った靴 惜しい試合 やつぱり安い
C	西ドイツのM市(ここへ我が社の若い工員が毎年十名ずつ派遣されています)
D	伊藤さん!、こつち、こつち、おねえちゃん、酒!

名詞的表現の段階をこのように決めるときの基準は、AとBの段階にたいしては「内部の構造」である。たとえば、「住宅の申込み」は「住宅を申込み」に対応するが、「住宅を」も「申込み」もA段階のものだから「住宅の申込み」もAだとする。それにたいして、CとDの段階を決めるときの基準は「外部との関係」である。たとえば、「西ドイツのM市」はこの文の提示語になっているが、提示語はC段階のものだから「西ドイツのM市」はCだとする。つまり、名詞的表現の段階を決めるときの基準が統一されていないのである。

4 文の構造研究の今後の発展

南の理論をさらに発展させていくためには、成分の「内部の構造」と「外部との関係」を分離して考える必要があるが、そのような方向の研究はすでに芽生えている。名詞的表現の研究例をあげよう。

名詞的表現の「内部の構造」についての研究としては、大島資生(一九八九)がある。大島は、修飾節をもつ「同格連体名詞」を「内部の構造」だけを基準にして、次のように分類している。

段階		例	
A	(ほくには) <small>常</small> うまく料理を作る才能(がない。)	A	黒人が非 <small>常</small> に貧しいという事実(を認識すべきだ。)
B	おそらく太郎はこんな馬鹿げたことをしないだろうとい	B	おそらく太郎はこんな馬鹿げたことをしないだろうとい
C	う考え(が浮かんだ。)	C	う考え(が浮かんだ。)
D	引き返せという命令(に逆らった。)	D	引き返せという命令(に逆らった。)

この分類では、「才能」を修飾する「うまく料理する」の中には「た」や主題の「くは」は現れないので、「うまく料理を作る才能」はA段階で、「考え」を修飾する節の中には「おそらく」や主題の「太郎は」のようなC段階の形式が現れるので、「おそらく太郎はこんな馬鹿げたことをしないだろうという考え」はC段階だとする。

南は、名詞的表現の段階を決めるとき、「内部の構造」という基準をAとBの段階を決めるためだけに使い、CとDの段階を決めるためには使えないとしていた。それにはたいして大島は、「内部の構造」をCとDの段階にまで拡大し、統一的な基準で名詞的表現の段階を決めることに成功したと言える。

一方、「外部との関係」から名詞的表現の段階を考えるなら、名詞のレベルではなく、名詞に格助詞やとりたてて助詞がついた、文の成分のレベルを対象にすべきだろう。名詞を中心に構成された成分については、野田尚史(一九九五)が次のような分類を行っている。

段階		例	
A	林を(食事に誘った。)	A	そこにいる人を(食 <small>事</small> に誘った。)
B	林さえ(誘えばいい。)	B	そこにいる人さえ(誘えばいい。)
C	林は(お医 <small>者</small> さんだ。)	C	そこにいる人は(お <small>医</small> 者さんだ。)
D	林なら(知ってるよ。)	D	そこにいる人なら(知ってるよ。)

この分類では、名詞的表現の内部が単なる名詞の「林」か、連体修飾節がついた「そこにいる人」かは問題にしない。「外部との関係」つまり、どんな環境に現れるかという基準や、どんな述語と呼応するかという基準によって「くさえ」や「くは」を分類している。

南は、「外部との関係」という基準をCとDの段階を決めるためだけに使い、AとBの段階を決めるためには使えないとしていた。野田は、「外部との関係」をAとBの段階にまで拡大し、統一的な基準で、名詞を中心に構成された成分の段階を決めようとしている。

そのほか、加藤陽子(一九九五a、一九九五b)では、従属節の分類を行うのに、基準として「内部の構造」を使わず、「外部との関係」である、主文のモダリティや否定のスコープをもとにした「従属度」だけを使っている。また、益岡隆志(一九九七)では、従属節の「内部の構造」を基準にした「従属節のレベル」と、「外部との関係」を基準にした「従属節の従属度」を別のものとしている。そして、疑問などのスコープを決定するのは「従属節のレベル」ではなく、「従属度」だという議論を展開している。

「内部の構造」という基準を使えるのは従属節など、その内部が文に近い形をしている成分に限られるが、「外部との関係」という基準は、どんな成分にたいしても使える。南の理論をさらに精密にし、そして拡大していくためには、二つの基準による分類を別のものとするだけでなく、より広く使える「外部との関係」をさらに重視することが必要だと思われる。

5 言語生活の研究

言語生活の研究では、敬語に関するものと日常会話に関するもの

が多く収められている。どの論文も広い視野からさまざまな問題が取り上げられており、これからの研究のヒントになる。

敬語に関する研究では、尊敬語、謙讓語といった敬語の文法的な体系より、敬語がどのような機能を持ち、実際にどのように使われるのかという使用条件に重点をおき、それをモデル化しようとしている。

モデル化といっても、実態を単純化したり、扱う対象を狭く限定したりはしない。たとえば、「II-2 階層差と待遇表現」では、待遇表現に関係がありそうな上下関係を七種類（身分的、生得的、経歴的、役割的、差別的、能力的、立場的に分けている。また、「II-3 敬語の機能と敬語行動」では、敬語の表現に「随伴的非言語表現」（話すときの顔の表情や間のおき方、書くときの字体や用紙の種類など）や「独立的非言語表現」（服装や、ものを扱う場合の躊躇の態度など）を含めている。

日常会話に関する研究でも、他の研究者があまり注目してこなかったテーマが取り上げられている。たとえば、「II-7 日常会話の話題の推移」では、録音資料をもとに、日常会話での話題の推移をパターン化し、そうしたパターンと会話の状況との関係を考察している。また、「II-8 フリの研究」をはじめ、いくつかの論文では、ストリートに言うか、もってまわった婉曲な言い方をするか、皮肉っぽい言い方をするかといった「フリ」（表現態度や、「あらたまり」「くだけ」といった「ことばの調子」について触れている。

このような視点は、人間のコミュニケーションに関わる多くのフアクターを動態的にとらえようとするものであり、これらの論文が書かれた時期を考えると、時代を先取りしたものだと言える。これ

から人間のコミュニケーションをめぐって学際的な研究がますます盛んになっていくと思われるが、南の言語生活研究にはそうした研究のテーマを見つけたときのヒントが詰まっている。

このように、本書は、言語体系と言語運用の間を行き来し、モデル重視とデータ重視の間を行き来しながらユニークな言語研究を行ってきた南の試行錯誤の記録であり、これからの研究の種（ネタ）が詰まった福袋と言えるだろう。

【参考文献】

大島資生（一九八九）「命題補充の連体修飾構造」について」「日本語研究」11 東京都立大学国語学研究室

加藤陽子（一九九五a）「複文の従属度に関する考察 主節のモダリティを中心として」[Working Papers on Language Acquisition and Education] 6 国際大学大学院国際関係学研究所言語学プログラム

加藤陽子（一九九五b）「テ形節分類の一試案 従属度を基準として」『日本語教育論集 世界の日本語教育』5 国際交流基金 日本語国際センター

田窪行則（一九八七）「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5 明治書院

野田尚史（一九九五）「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志（他）編『日本語の主題と取り立て』くろしお出版

益岡隆志（一九九七）「複文」（新日本語文法選書2）くろしお出版
（平成九年六月十日発行 三省堂刊 A5判 六五六頁 本体価格二〇〇〇円）

——大阪府立大学助教授——

（平成十年八月二十六日 受理）